

翻刻 渡部寛一郎日記5・Ⅲ（大正八年一月～六月）

渡部寛一郎文書研究会

（要木純一・竹永三男・板垣貴志・内田融・大原俊二・居石由樹子・小林啓治・小林奈緒子・杉谷直哉・原洋二・本井優太郎・森安章）

摘要

渡部寛一郎文書は、渡部寛一郎日記、剪淞吟社に結集する人々の漢詩と関連文書、若槻礼次郎ほかの渡部寛一郎宛書簡、私立中学修道館など渡部寛一郎が関わった教育関係文書などで構成されている。中国文学・歴史学などの学際的研究によってこれらの諸文書を解説・分析し、近代日本の漢詩文学と政治文化の関連を山陰地域に即して実証的に追究することが本プロジェクトのめざすところである。今回は、渡部寛一郎日記第五冊のうち、大正八年一月から八年六月の部分を翻刻する。寛一郎が教育界から身を引いた時期のものである。漢詩、謡曲、旅行、家族・親族・友人との交流、歓談に日々を費やしているようであるが、地方政治、教育、経済に対する関心も垣間見られ、その交友関係は、後の、若槻礼次郎の後援会長としての、また、県会議員としての活躍につながるものがある。

キーワード：渡部寛一郎、山陰、政治、教育、漢詩

【解説】

本号で翻刻した「大正六年十二月起 日誌」は、例年どおり渡部家の穏やかな新年行事の記事で始まり、一月十一日・十二日には「郵便局長新年会ヲ開催ノ為、坐敷ヲ用立」て、「局長始メ男子ノ重ナル職員ヲ案内シテ小酌ヲ催シタリ」という記事も見られた。また、一月

十九日の「廣田水亭ニテ開催ノ謡新年会」出席の記事をはじめとして、趣味の喜多流謡の練習に励む日常も記録されている（「翻刻部寛一郎日記5・Ⅰ」「山陰研究」第十六号、二〇二四年参照）。

この「日誌」で今回翻刻する一九一九年（大正八）一月一日から六月三〇日に至る時期は、前年八月のシベリア出兵（ロシア革命干渉戦

争)と十一月の第一次世界大戦終結の後、一月十八日のパリ講和会議の開催とベルサイユ条約(パリ講和条約)調印(六月二十八日)、植民地朝鮮での三一独立運動の展開と弾圧、中国の五・四運動という世界史の激動の時代であり、国内では、前年夏の米騒動と原敬政友会内閣の成立の後、富山県滑川町で普通選挙期成同盟会が結成されるなど普通選挙運動が展開し(松尾尊允『普通選挙制度成立史の研究』岩波書店、一九八九年、一三一ページ)、一九一九年に入って『我等』(長谷川如是閑ら)、『デモクラシー』(東京帝大・新人会)、『社会主義研究』(堺利彦ら)、『改造』(改造社)などが相次いで創刊されるなど、大逆事件後の「冬の時代」から本格的に脱してデモクラシーが展開した時期であった。

渡部寛一郎は、このような内外情勢を反映した記事を書き留めていた。その一つは、二月十一日の次の記事である。

十一日 午后、風雪激甚。正午、城山興雲閣ニテ開催ノ憲法発布三十年記念会ニ出席。了テ、高等小学校講堂ニテ大坂毎日ノ主催ニ係ル講演会ニ出頭。

戦前、「紀元節」として国家的祝日とされた二月十一日は、「憲法発布記念日」と読み替えられたことが夙に指摘されていた(日本史研究会編『日本の建国』東京大学出版会、一九五七年、第九章)。一九一三年から一九二五年に至る時期は、「二月一日を紀元節や神武建国の日としてよりも、明治の建国すなわち憲法発布の日として、あたらしい民主主義的日本を建設するたまたかの決意をかためる日として、より強く意識される」(同書一八六ページ。松尾尊允氏執筆)。「一九一九(大正八)年二月一日は、憲法発布三〇周年にあたった。この日は、多くのところでは紀元節の祝典というよりは、憲法発布の

祝典として祝われた」(二〇四ページ、中塚明氏執筆)というのである。実際、この日、鳥取市では、鳥取市主催の「憲法発布三十年記念祝賀会」が県会議事堂で開かれ(君が代の奏楽)「紀元節の唱歌」あり、松江市でも同様の行事が開催されていた(以上、鳥取市・松江市とも「大阪朝日新聞(山陰版)」一九一九年二月十二日)。

松江市 松江市役所主催の憲法発布三十年記念祝賀会は松江城山興雲閣に於て十一日正午より開催されたり来会者二百余名にて高橋市長の挙式の挨拶の後君が代の奏楽西村知事の勅語奉読ありそれより、市長の発声にて両陛下の万歳を三唱し開宴盛会なりき

記事から確認できるように、両市の記念会は「大日本帝国憲法」発布三十年という節目の年の行事として市当局の主催で開かれたものであるが、憲法を発布した明治天皇を称えるという点で、基本線は「紀元節」行事と異なるものではなかった。

この点を明確に論じているのが「山陰新聞」(一九一九年二月十一日)の論説「紀元節感懐 憲法発布三十周年」である。そこでは、「今や世界の思潮滔然として民本主義を呼号し、其勢堤塘を決せるに似たる者あり」と書き出して世界的なデモクラシーの思潮の隆盛を論じた上で、「我が国の如き幾千年前の太古に在りて既に其主義に則り、君民同治の善政範を垂る、甚だ久しき者あるを」と、日本が古来民本主義国であったとする。そして、「神武」以来の「歴聖の仁政」(歴代天皇の仁政)が中世武家政権の下で暗転したものの、明治維新によって回復されたとする「三分法」で日本の歴史を論じ、憲法発布がそのよくな日本の「民本主義」をとる「国基」を「愈堅く」したとするのであって、民本主義の高揚を天皇制国家の歴史の中に吸収しようとするものであった。以後の展開が、デモクラシーを押し進める方向に向か

うのか、それとも、それを国体論の枠内に押しとどめるのか、その帰趨は、普選運動・社会運動の展開と政府・支配層によるその抑制・統御の政治史の中で決せられることになる。

世界と日本の時代状況を反映したもう一つの記事は、六月二十八日の講和条約調印を承けた次の記事である。

廿九日 快晴。此日ヨリ向フ五日間、世界的平和祝賀ノ為メ、全国各戸軒頭ニ旭旗ヲ掲ケテ、祝意ヲ表セリ。

「渡部寛一郎日記」は、渡部寛一郎と渡部家の日常、若槻礼次郎後援会である克堂会および憲政会の地域における活動という政治活動、剪湊吟社に拠る漢詩と喜多流謡曲という趣味の世界の記録を中心としながらも、当該時期の世界と日本の動向を反映した記述を掲載していたのである。

(竹永三男)

〔凡例〕

一、本号では、「渡部寛一郎関係文書」(松江市新雑賀町・原洋二氏所蔵)から、渡部寛一郎日記第五冊の一部を翻刻する。第五冊には、大正六年十二月一日から、大正九年一月一日までの記事(途中省略有り)の記事が収められている。今回はその約四分の一に当たる大正八年一月一日から、同年六月三十日までの記事を翻刻した。

一、原本は、薄茶色厚紙表表紙、裏表紙、原稿用紙(「修道館」の三字が中心下に刻されている)を綴じ合わせた冊子である。原稿用紙は、縦罫(朱線、上下余白にメモ記入あり)十二行、表裏計二十四行を真ん中で半分に分けて折っている。縦約二五センチ、横約一七・五センチ。

一、読みやすいよう句読点を付した。句読点の付け方には統一的な基

準はない。原文にも句読点が付けられているが、必ずしも本稿のものとは一致しない。

一、合体字はカタカナ書きとした。

一、漢字は原則として常用漢字体を用いた。

一、不明文字・判読不能文字は、字数に従い、□□とする。字数が不明な場合は、「」を用いた。

一、本文は、削除や後補が錯綜しているが、後補したものを含めて翻字し、削除や訂正は、必要と判断したもののみ、削除記号を付して、訂正前を示したり、注記をしたりした。

一、適宜【】を付して注記を補った。

一、原文の改行は、特に必要と認めた場合以外は追い込みとした。逆に読みやすいように、改行した部分もある。

一、本文の文字サイズは同一とした。内容を捕捉することに重点を置き、縦書き・横書き・見せ消し・文字の大小・改行・字下げ、空白など、必ずしも原文の体裁の通りではない。

〔本文翻刻 大正八年一月より六月〕

大正八年一月

元日 嘉例ニヨリ未明起床。謙一郎、敏行、誠、健二、一雄并寛子、和子同伴、氏神ニ参拜。帰テ、迎年式ヲ挙ケタリ。九時過ぎ、雑賀小学新年式ニ参席。夫ヨリ、市開催ノ新年会ニ出席。其前後、青柳、本町佐藤、三島佐【次】脱か【右衛門、四方諸氏回礼。午時過、帰宅。此日、午前風、后雨。

二日 降雪甚シ。早起、買初メトテ京店辺迄出浮、二三品購求、一旦

帰宅。更二理髪店ト風呂屋ニ行き、帰テ、一同ト食卓ヲ共【二】脱か】スルコト如前日。終日在宿。

三日 降雪。午前ヨリ、近所并高橋、松浦其他回礼、大酔。夜ニ入り、帰宅。山寄氏出松、来訪。

四日 降雪。堆積殆ト尺ニ及フ。終日在宅。風邪気味ニテ、夕刻ヨリ臥床静養。

五日 降雪甚シ。積雪尺余ニ及フモ尚止マス。謙一郎一行、此夜帰神ノ筈ナリシモ、山陰線路不通ノ為メ、出発ヲ見【合】脱か】セタリ。

六日 時々降雪。感冒ノ為、終日静養。

七日 天候稍隠。山陰線開通ノ報ヲ得、謙一郎等帰神準備ニ着手。午后八時初上リ汽車ニテ出発。此日、石橋喜市氏来訪。午餐ヲ共ニシタリ。

八日 天候穏和、曇。山寄氏結婚ノ件ニ関シ、正午過二目次氏、晚餐后ニ黒沢氏来訪。夫々打合ヲ為シタリ。此日、午前十一時過(無事着)ノ旨謙一郎ヨリ打電アリ。一同安神セリ。

九日 早起、郵便局ニ行き、山寄呼出ノ電報ヲ発シタリ。此日吉辰ニ付、山寄生結納品ヲ福本氏ヘ伝達之件、黒沢氏ニ依頼スル為メ、山寄生ト同伴、黒沢氏ヲ病院ニ訪問、委嘱。帰途、殿町三階楼ニテ小酌。黒沢氏ノ報告ヲ待受ケ、取扱済ノ吉報ヲ得、対酌。興ヲ尽シテ、帰宅。挙式期日打合ノ為、先方父福本氏モ来会。山寄生初対面ノ挨拶ヲ為サシメタリ。

十日 曇。

十一日 小雨。此日、郵便局員新年会ヲ開催ノ為、坐敷ヲ用立。

十二日 小雨。前日同様。但兩日共二階ヲ特別休憩所トシテ、局長始メ男子ノ重ナル職員ヲ案内シテ小酌ヲ催シタリ。此關係上ヨリ、山田

水亭ニテ開催ノ局員男子部新年会ニ、兩夕共出席シタリ。

十三日 曇。風。午后、入浴ニ行き、帰途、春子方訪問シテ、帰宅。此夜、永野武一郎氏訃音ニ接シ、即時老母ヲ慰問シタリ。

十四日 微雪。

十五日 年頭礼として、向坂、森、黒澤、宅和、坂井諸氏ヲ歴訪。坂井方ニテ晩酌ノ饗応ヲ受ケ、夜ニ入り帰宅。

十六日 曇。寒氣甚シ。

十七日 曇。松浦氏甥雀部進氏渡米候トテ来訪。依頼ニ任セ、矢田氏ヘ添書致候。亡母命日ニ付墓参。

十八日 曇。午后、佐藤半農氏ヲ訪問。

十九日 前陰、后風雪。午前、富山氏訪問、謡会打合ヲ為シ、午后、廣田水亭ニテ開催ノ謡新年会ニ出席。尚、会后、更ニ臨水亭ニテ開催セル書店教文館開業披露宴ニ臨席。九時過、帰宅。

廿日 夜来風雪。寒氣甚シ。此夜半ヨリ胃腸ヲ害シ、服薬静養。此夕、吉岡幹氏来訪。

廿一日 終日、風雪激甚。從テ寒氣嚴シ。終日静養。

廿二日 時々降雪。風寒シ。終日静養。山崎氏来訪。同氏婚儀ノ件打合ヲ為シタリ。

廿三日 穏和。曇。午后、市役所水道事務所出頭。水道設置費支払用ヲ弁シ、帰途、病院ニ黒沢氏ヲ訪問。山寄氏婚事打合ヲ為シテ、帰宅。

此夕原□次郎、お園、佐々木栄助来訪セシニ付、年頭心ニテ小酌ヲ共ニシタリ。了テ、高橋市長訪問。要談ヲ弁シ、帰宅。

廿四日 小雨。午前、福本氏来訪、婚嫁ノ件打合セテ、辞去。山寄氏モ此日帰郷。此夜、田中莊氏来訪。

廿五日 陰雨、時々風アリ。ま起事永野老人方訪問。午前ヨリ夜ニ入

リ帰宅。

廿六日 穩晴。午前、松浦氏來訪。

廿七日 雨。午后、外出。黒沢氏ヲ病院ニ訪ヒ、要談ヲ弁シテ、帰宅。

廿八日 微雪。此日、山寄庫助結婚当日ニ付、同人方ヨリ迎人トシテ、

其叔父森山直作氏出松來訪。種々打合ノ末、午餐ヲ共ニシ、終テ停車

場前茶店ニ至リ、福本父母其他親戚ニ紹介シテ、一時五十分發汽車、

新婦同伴、波根駅ニ至リ、更ニ出迎諸人ト挨拶シ、其案内ニテ山寄氏

方ニ至リシハ五時過ナリシ。此夜、無滞式了ル。

廿九日 微雪。山寄方滞在。

卅八日 卅日 微雪。波根駅上リ三番ニテ帰松。

卅一日 風雪。寒氣甚シ。此夕、永野氏遺族ヲ牧師館ニ吊訪ス。

二月

一日(旧元日) 積雪殆ント尺余。木下やすの訃電ニ接シ、直ニ吊電

ヲ發シタリ。此夜、修道会新年会ヲ山田水亭ニテ開催セシニ付臨席、

山崎妻ノ父福本謝礼トシテ來訪。

二日 曇。

三日 風雪。此日、春子方ニ至リ午餐ヲ共ニシタリ。政子亦來會セリ。

四日 此【日】脱か 風雪特ニ甚シ。寒氣亦同様。終日蟄居。芳子

此日ヨリ病氣欠勤靜養。

五日 微雪。外出、市役所ニ出頭。上納用ヲ弁シ、帰途、商業校ニ田

中融氏ヲ訪ヒ、黒沢氏依頼ノ件ヲ委嘱。更ニ本町佐藤氏ヲ訪問シテ、

帰宅。

六日 穩陰。寒威甚シ。温泉津木下氏へ紹介セシ看護婦成相キヨノ帰

來訪問、同家近状ヲ報告シタリ。

七日 曇。午后、外出。京店教文社ニ立寄、少時談話后、足立謡曲師

訪問、復習。黄昏、帰宅。

八日 又々風雪。寒氣甚シ。

九日 風寒シ。時々雨雪。午前、外出。江田享次郎氏訪問。此夜、足

立氏方謡曲稽古ニ出席。

十日 微雪。風寒シ。商業校武術大会ノ案内ニテ出席。前十時過ヨリ

后三時ニ至テ、帰宅。

十一日 午后、風雪激甚。正午、城山興雲閣ニテ開催ノ憲法發布三十

年記念會ニ出席。了テ、高等小学校講堂ニテ大坂毎日ノ主催ニ係ル講

演會ニ出頭。

十二日 曇。午前、市役所ニ出頭。帰途、織原氏訪問。要談ヲ為シテ、

帰宅。此夜、高橋氏來談。

十三日 曇。山寄夫妻ノ招待ニテ、春子同伴、岡坂悅笑軒ニテ西洋料

理ニテ午餐ヲ共ニシテ、帰宅。此夜、青柳ニ行キ、晚餐ヲ共ニシタリ

スル筈ナリシモ、氣分不例ノ為見合セタリ。

十四日 時々風雪。青柳訪問。前約ニヨリ午餐ヲ共ニシタリ。此夜、

齒科医四方氏開業記念日ニ付、例年通招待ニヨリ臨席。

十五日 好晴。塩治矢田方ニテ、曳野新夫婦ト其父親招待セシニ付、

接伴役旁、誠同伴、訪問一泊、饗応ニ預リタリ。

十六日 好晴。午后、矢田方辭去。三時過、今市發汽車ニテ曳野夫婦

等ト同伴帰松。

十七日 好晴。

十八日 好晴。午后、青柳、坂井、永野、森、諸氏歴訪、帰宅。

十九日 好晴。午前、四方氏、午后、田中氏訪問。四方氏ヨリ帰途、

成相氏ヲ銀行ニ訪フ。

廿日 曇。

廿一日 好晴、后曇。

廿二日 微雨。午后、田中氏ヲ訪問。同氏方ニテ所望シタル丸盆代□
渡。

廿三日 微雨。午前、臨水亭道具会參觀。了テ、田代習氏ヲ訪問。

廿四日 曇。【上欄外に「大、目、」とあり】

廿五日 晴。早起。四方醫院ニ赴キ治療ヲ受ク。午后五時ヨリ開催ノ
松江図書館評議員会ニ出席。晚餐ヲ共ニシテ、帰宅。【上欄外に「ク
、ク」とあり】

廿六日 好晴。午后、山寄庫助夫婦并其母と娘四人來訪。晚餐ヲ饗シ
タリ。【上欄外に「ク、ク」とあり】

廿七日 曇、后小雨。山寄妹本日ヨリ來ル。此日、富山氏并増田祐七
俸某來訪。【上欄外に「日雇」とあり】

廿八日 小雨。

三月

一日 好晴。午后五時ヨリ、永野武一郎氏五十日相当ニ付、晚餐会案
内ヲ受ケ、早起同伴臨席。尚七時ヨリ記念会ニモ列席。十一時過帰宅。

【上欄外に「日雇今」とあり】

二日 曇。風力強シ。

三日 好晴。午后、市役所出頭、用ヲ弁シ、帰途、谷口、山本兩氏ヲ
訪問シ、更ニ橋南共同墓地ニ至リ、永野武一郎氏墓ニ參拜。帰途、其
遺族ヲ本式訪問。

四日 好晴。

五日 好晴。早起、四方醫院ニ行キ齒ノ治療ヲ為シタリ。

六日 好晴。早起、前日同様齒ノ治療ヲ為シタリ。

七日 曇。午后、散策ヲ兼、城内稲荷參詣。夫ヨリ坂井、青柳歴訪、

帰宅。

八日 小雨。此夕、山寄庫助氏出松來訪。

九日 曇、后小雨。山寄氏午后帰宅。石橋氏子供同伴出松來訪、終列
車ニテ帰宅。

十日 曇、風寒シ。午后、松江高等女学校ニ開催ノ音楽会傍聴。

十一日 好晴。在宿。

十二日 曇。野津喜代太郎氏來訪。午餐ヲ共ニシテ、談話ニ時ヲ移セ
リ。

十三日 曇。在宿。

十四日 曇、風寒シ。在宿

十五日 微雨后晴。此夜、白濁小学校ニテ開催ノ新派日宗講演会ニ出
席、聴聞。

十六日 曇。夕刻、曳野方訪問、談話ニ時ヲ移シ、蕎麦ニテ小酌ノ饗
応ニ預タリ。誠、一雄、偶然同席。

十七日 晴。

十八日 晴。午前外出。本町佐藤氏ヲ訪問。夫ヨリ、末次本町松江銀
行支店ニ諏訪部氏ヲ訪問。来廿一日山誠古稀祝賀会ニ參ノ挨拶ヲ為ス
ト共ニ、記念品料式円渡シ置キタリ。此夜、八時發汽車ニ便乗、神戸
出向。

此日發程。四月十四日、兵庫駅午前十時過發、午後十時過帰宅。【上
欄外に「此間出遊」とあり】

四月

十四日 曇。此夜、帰宅。芳子、政子并誠、健二、一雄等駅ニ出迎居
タリ。

十五日 雨。午后、四方氏ヲ訪問シテ帰宅。

十六日 晴。午后、外出。成相氏ヲ銀行ニ訪問。製蠟会社株券引替ノ用向ヲ弁シ、夫ヨリ、京店ニ至リ、諏訪部氏其他一二軒訪問シテ、帰宅。坂井友義氏來訪。談話ニ時ヲ移シ、且晚餐ヲ共ニシタリ。

十七日 曇。散歩ノ序ニ、加田氏ヲ学校ニ訪問シテ、帰宅。

十八日 晴。旧下女希子來訪。朝鮮其他ノ談話ニ時ヲ移シタリ。

十九日 雜賀小学校創立記念式ニ臨席。一席ノ挨拶ヲ為シタリ(忍耐、自治心ノ必要ニ就テ)。此日、在大坂県友会總會開催ノ筈ニ付、特別會員ニ推挙セラレタル關係上、祝電ヲ發シタリ。夕刻、散歩。青柳方訪問、小酌、夜に入り帰宅。此日、内田好之輔氏久振ニテ帰省候トテ、來訪。偶、田中融氏來訪。暫ク新旧談話を試ミタリ。

廿日 快晴。坂井友義氏ヲ訪問。午餐ノ饗応ヲ受ケテ、帰途、京店園山其他一二軒訪問、帰宅。【上欄外に「此日ヨリ庭園牡丹花蕾ヲ破リタリ」とあり】

廿一日 快晴。午前、高橋氏ヲ訪ヒ、相携テ内田好之輔氏ヲ其宅ニ訪問シテ、帰宅。午后、古城憲治氏ヲ赤城館ニ訪問。久闊ヲ叙シ、且在京城啓次郎へ送品ヲ托ス。夫ヨリ、濱田女学校生一行ヲ追跡シテ、松平家用邸ニテ面会。慰問ノ挨拶ヲ為シ、且暫ク同行、安來製鋼松江支場ヲ參觀シテ、帰宅。此夜、帰鮮ノ古城氏并帰京ノ内田好之輔氏ヲ停車場ニ見送りタリ。

廿二日 雨。早起、濱田女学生一行ヲ其宿小林旅館ニ慰問シタリ。濱田高女生引率者横山、直良、湯川等挨拶ニ來訪。此夜、右一行ヲ其旅館ニ慰問シタリ。【上欄外に「牡丹花ノ見頃ハ此一兩日間ナリシ、」とあり】

廿三日 快晴。濱田高女生一行ノ帰校ヲ停車場ニ見送タリ。

廿四日 穩晴。黄昏、一時的ナカラ風雷甚シ。午后、持田村丸山祭ニ

付、野津喜代太郎ノ案内ニヨリ往訪。夜半、帰宅。

廿五日 晴。旧任地濱女校卒業生能美順子、牧戸ヤス子二人來訪セシニ付、晚餐ヲ共ニシタリ。旧下女希子ヲモ招キタリ。午前、田中氏來訪。

廿六日 晴。午前ヨリ、風強シ。高橋氏出勤掛來訪。【上欄外に「(理髮)」とあり】

廿七日 晴。午后一時ヨリ図書楼上ニテ読詩会開催ノ通知ニ接シ、出席セシモ、横山氏行違不參ノ為、流会トナリ、帰途、□崎氏ト同伴、臨水亭道具会ヲ一見シテ、帰宅。

廿八日 晴。午前、靜養灸治。午后、床几山付近散策。

廿九日 晴。午前、靜養灸治。午后、城山運動場商業校運動參觀。

卅日 雨。此夕、濱田高女教員飯島貞子京都へ転任候トテ挨拶ニ參リ、晚餐ヲ共ニシタリ。

五月

一日 曇。飯島氏ヲ停車場ニ見送りタリ。

二日 曇。黄昏、暴風雨。午后、高等女学校ニテ開催ノ比田井天來、井原雲涯両氏ノ書道講演傍聴。

三日 殆ント終日、狂風雨。殊、午前、降霰アリ。寒氣ヲ覺ユ。黄昏、高橋氏來訪小酌。

四日 晴。正午、坂井氏方訪問。留別トシテ午餐ノ饗応アリ。此夜、停車場迄芳子同伴見送タリ。藤岡暢茂氏死去ニ付、往吊ス。此日、春子夫妻來遊。

五日 晴。午前、市役所出頭、納物ヲ為シ、帰途、物産陳列所一覽。夫ヨリ、本町佐藤氏訪問。十一時ヨリ四時頃迄、対酌快談。午餐ヲ喫シテ、帰宅。此夜、藤岡氏葬儀ニ会葬シタリ。

- 六日 晴。午前、藤岡氏法要ノ為、寺町西光寺ニ參詣。此後、六時ヨリ、隣家佐藤子供十三誕辰祝延ニ招カレ、快飲。夜深、帰宅。【上欄外に「日雇今治郎」】とあり】
- 七日 晴。終日、静養。黄昏、佐藤半農氏來訪。【上欄外に「同上」】とあり】
- 八日 曇。終日、在宅。諸方ヘノ書状認ム。
- 九日 快晴。
- 十日 晴。浜田謠友染田氏來訪。午餐ヲ共ニシ、且田村一曲同唱。
- 十一日 雨。
- 十二日 曇、風。
- 十三日 曇。午前、外出。青戸建行氏ヲ吊訪。夫ヨリ、山本権七氏ヲ其宅ニ訪問。暫ク談話後、更ニ其別荘ニ至リ、庭園新緑ノ景ヲ賞シ、喫茶。了テ辞去、帰宅。午后四時、床几山青戸氏葬儀ニ会葬。
- 十四日 半陰半晴。午前、田中莊氏來話。午后、神山金次郎氏來話。共ニ時ヲ移シテ辞去。此日、早起、深雪連名ニテ姫路局発(コンヤツク)ノ電報參リ、一同喜悅。待受準備ニ着手。豫報通、十時過、早起、深雪、孫女寛子、和子四人帰宅。
- 十五日 時々風雨。
- 十六日 半陰半晴。午前、外出。佐藤半農ヲ訪問。午餐ノ饗応ニ預リ、一時過帰宅。更ニ外出。四方氏ヲ訪問、無音ヲ謝シ、帰宅。
- 十七日 半陰半晴。気分不例ニ付、勝部医院ニ就キ、診察ヲ受ケ、服薬。此日、早起事深雪及孫女兩人同伴、青柳訪問。此日ヨリ、山陰オリンピック第七回大会開催。中学梅津勇之進米子ヘ転任、松江高女荒木幹枝大阪ヘ出向ノ為メ、告別トシテ來訪。此夜、荒木氏ヲ見送りタリ。【上欄外に「土曜」】とあり】
- 十八日 快晴。午后、外出。佐藤半農ヲ訪問セシモ、不在。夫ヨリ、京店迄散策ヲ試ミテ、帰宅。【上欄外に「日雇時」(日曜)】とあり】
- 十九日 晴。午后、西村工業校長來訪。囲碁數番ヲ試ミタリ。【上欄外に「(ク)」】とあり】
- 廿日 陰。風稍寒シ。平塚運吉氏告別ノ為來訪。黄昏、高橋市長來訪。此夜、深雪母子發松帰神。
- 廿一日 雨。
- 廿二日 陰。此夕、曳野方ニ至リ、春子妊娠帶祝ノ為、小酌。産婆ノ相手ヲ為シタリ。
- 廿三日 陰。風寒シ。感冒気味ニテ、終日、臥摩静養。
- 廿四日 午前、外出。洞光寺ニ至リ、來月一日ヨリ三日間佛教講習会ノ件打合セタリ。午后、本町佐藤氏訪問、小酌。高談ニ時ヲ移シテ、辞去。
- 廿五日 半陰半晴。午前、千家尊愛氏一行ヲ一文字屋支店ニ訪問。午后、市役所楼上ニ於ケル同氏講演会出席。
- 廿六日 晴。午前、千家氏一行ヲ停車場ニ見送り、帰途、臨水亭ニ於ケル道具会參觀。
- 廿七日 半陰半晴。午后、草場氏ヲ其寓居ニ訪問。
- 廿八日 晴。草場氏夫妻各別ニ來訪、告別ノ挨拶ヲ為セリ。【上欄外に「今次郎」】とあり】
- 廿九日 晴。
- 卅日 晴。此夜、草場氏一行ヲ見送りタリ。
- 卅一日 曇。午前、暖甚シキモ、午后、稍冷ヲ覺ユ。
- 六月
- 一日 晴。矢田鶴之助氏大原郡立農林ヘ転任、告別ノ為來訪。此夕、

佐藤半農氏今日帰省ノ為招飲。午后三時ヨリ、洞光寺ニテ開催セル仏教講習会ニ出席。

二日 曇。蒸暑甚シ。矢田氏ノ為臨水亭ニテ開催セル送別会ニ出席。此夕、在坂内田収氏来訪。

三日 朝来降雨。午前、外出。市役所出頭、用ヲ弁シ、午后、洞光寺講演会ニ出席。尚、此夜、市役所講演会出席。

四日 梅雨。午前、外出。内田収氏ヲ其実家米邨氏ニ訪問セシモ、既ニ出発任。

五日 曇。
六日 〃。此夕、松浦、高橋両氏入違ニ来訪。【上欄外に「日雇今次郎」】とあり】

七日 〃。室内大掃除。【上欄外に「今ト時」】とあり】

八日 曇。此日、若曾根氏他へ転任。此日ヨリ、畳表替着手。【上欄外に「お時」】とあり】

九日 曇。西伯郡村上龍氏来訪。【上欄外に「お時」】とあり】

十日 曇。【上欄外に「お時」】とあり】

十一日 〃。在大連桑垣是正氏来訪、一泊。永江誠一氏告別ノ為来訪。【上欄外に「お時、今」】とあり】

十二日 曇。【上欄外に今とあり】

十三日 東北暴風雨。

十四日 曇。
十五日 曇。昨十四日附ニテ、松江市長ヨリ市設学事会員囑托ノ書面接受。午后、本町佐藤方訪問、小酌。夕刻ハ、曳野方ニテ晚餐ヲ共ニシタリ。此日、ま起木次行。
十六日 微陰雨。午前、高等女学校并市役所ニ雨森氏ヲ訪ヒ、村上龍

氏依頼ノ件打合、帰宅。午后、四方氏ヲ往訪。

十七日 陰雨。ま起木次ヨリ帰宅。午后、富山方謡相談会出席。

十八日 半陰半晴。午前、若曾根氏転居挨拶ノ為往訪。同時ニ足立金次郎氏死去ノ報ニ接シ、往吊ス。

十九日 陰。図書館ニテ開催ノ読詩会ニ出席。更ニ景山旅館ニテ剪淞吟社第四十三集開催。翌午前二時、散会。

廿日 半陰半晴。加田氏老人死去ノ報ニ接シ、往吊。其前後銀行用ヲ弁シテ、帰宅。【上欄外に「大工二人」】とあり】

廿一日 陰。溽湿暑甚。
廿二日 陰雨。午后、廣田水亭ニテ開催謡曲会ニ出席。

廿三日 陰。
廿四日 〃。【上欄外に「大工」】とあり】

廿五日 晴。【上欄外に「〃」】とあり】

廿六日 降雨。
廿七日 半陰半晴。午前、市役所出頭、水道用を弁シ、午后、四方氏訪問。【上欄外に「大工」】とあり】

廿八日 〃。野津八太郎、中原保孝両氏来訪。【上欄外に「大工」とあり】

廿九日 快晴。此日ヨリ向フ五日間、世界的平和祝賀ノ為メ、全国各戸軒頭ニ旭旗ヲ掲ケテ、祝意ヲ表セリ。此夜、田中莊氏来訪。

三十日 快晴。【上欄外に「今、時、常」】とあり】

〔付記〕

本稿は、

科研費基盤研究（C）研究課題／領域番号 22K00340 近代漢詩
が形成する山陰地域の文化教養環境―漢詩人と官僚・政党政治家の
交遊の分析（期間二〇二二～二〇二四年度研究代表者 要木純一）
及び、

島根大学法文学部山陰研究センター 山陰研究共同プロジェクト
ト 近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置―若槻克
堂と剪淞吟社の学際的研究（課題番号二二一三 期間二〇二二～
二〇二四年度 研究代表者要木純一）
による成果の一部である。

Reprint ; Diary of Watanabe Kanichirou: 1917-1919 (Ⅲ)

Research Project on Works of Watanabe Kanichirou

[A b s t r a c t]

Watanabe Kanichirou (1854-1938) was an influential educator in Shimane prefecture and the head of the society in support of Wakatsuki Reijirou (Kokudoukai). Here we transcribe his diary written on 1917-1919. Through this diary we can perceive how Watanabe, after his retiring from teaching, made relationship with important persons of educational society and statesmen and beaurocrats. Also Watanabe made many contributions to the world of letters (including Kanshi) and devoted himself to Noh music in Sanin district.

Keywords: Watanabe Kanichirou, Taisho, Kanshi, Noh music, Sanin, Education, Politics